荒垣秀雄天声人語賞　中学生の部／中・高校生の部　特選

神奈川県立あおば支援学校中学部　二年　内田　博仁

僕は重度の自閉症だ。一言も話すことが出来ない。この病気はとても複雑で想像以上に困難な疾患だ。母は僕が二歳の時僕のような重度の疾患を持つタイプの子はおそらく一生話すことはないと宣告された。ある日訓練会で発達専門の人の放った言葉に僕はショックを受けた。「この子は将来作業所にいくことになるのよ。もう決まったようなものだから」僕はまだ二歳だった。たった二歳なのに僕の人生は決まってしまうの？夢を持つことも出来ないの？僕の名前は両親が世界で活躍することが出来ますようにと願いを込めてつけてくれた。父と母には夢があったはずだ。訓練して良くなりますようにと毎日のように色々な場所に連れて行き僕の可能性を決して諦めなかった父と母。僕はこの時誓ったのだ。僕は僕の能力可能性を諦めず絶対伸ばしてみせると。僕は知的障害があると診断されていたが色々理解していた。自閉症という病気はとても複雑な病気だ。理解していても口には出せないし表情にも出せない子もいる。一種の機能障害、運動障害だと思う。僕は話せない代わりに電子手帳で打つ訓練を五歳の時から行っていた。一日も休まず練習したが二語文を補助なしで自身で打てるまでに二年かかった。そして自分の思いを表現するのにさらに二年かかった。正直自分の思いを打つのは勇気がいる。出来ない子として諦めてしまうほうが楽かもしれない。でも僕は自分の内なる思いを閉じ込めておきたくなかった。自分の人生を豊かで前向きなものにしたいという強い信念があったのだ。小学校の時先生が二分の一成人式で自分の夢を皆の前で打ったらどうかと提案してくれた。夢のようだった。そして僕は皆の前で打った。「夢は小説家」と。限界を決めてしまうのは簡単だ。でも自閉症の僕でも夢を持つことが出来る。だから限界など決めてはいけない。夢を持つという事は自分の人生を自分で作り上げるという事。僕は夢を持ち自分の人生を歩んでいきたい。